

患者を生きる

4492

膀胱がん、27年目の選択①

「膀胱がんです」

静岡市の小出宗昭さん(63)がそ

う告げられたのは、27年前。銀行員だった36歳の1月のことだ。

暮れに、職場のトイレで大量の血尿が出た。年明けに総合病院で膀胱内を調べると「大丈夫、とれば治るから」と医師に言われた。

良性のポリープかなと思っていた。尿道から内視鏡をいれる手術(TURBT)を受け、術後の説明を聞いていたとき告げられた。

「え？ まじ？」

動転する小出さんに、主治医の柳岡正範さん(69)「現・あしたば診療所長」は丁寧に説明した。膀胱がんは再発を繰り返しやすいが、定期的に検査をして早く発見できれば、切除できる。仕事も今

まで通り続けられる。

「医師がそこまではっきり言うのだから、きつと大丈夫」

一晩だけ悩み、前を向いた。がんの宣告から5年後、仕事で



がんの体験を語る小出宗昭さん。今も前を向いている。静岡市

大きな転機があった。銀行から、

静岡市の起業家支援施設「SOHOしずおか」に、責任者として出向するように告げられた。手探りで起業家を支援し、課題を抱える地域の中小企業の相談にも乗るうちに、取り組みが全国から注目を集めるようになっていった。

「今度、出向するんです」「新聞で取り上げられたんですよ」

毎月の定期通院は、柳岡さんに近況を報告する時間でもあった。

がんは2、3年おきに再発した。その都度、1週間ほど入院してTURBTを受けた。仕事は徐々に忙しくなり、スーツ姿で入院しスーツ姿で退院。そのまま仕事にいくことが常になっていった。

2005年2月。地元テレビ局

の一日密着取材をうけることになった。ところが、取材当日、どう

にも体調が悪い。前月から、膀胱にBCGを注入する治療を受けていた。その副作用で尿道がつまって排尿ができなくなっていた。

平静を装って取材を乗り切り、入院。膀胱内を洗浄する処置をうけたものの、体がきつかった。

直後に予定されていた講演会をキャンセルしよう……。弱音を吐いたとき、柳岡さんが言った。

「だめだよ、小出さん。待っている人がいるなら、いかなきゃ」

驚いた。うれしかった。支えられる、応援してもらうことで、こんなにも力がわくのか――。

「自分も全力で、挑戦する人を応援しよう」。心に決めた。

(鈴木彩子)

◆5回連載します。

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryo-k@asahi.comへお寄せください。



朝日新聞アピタル

「患者を生きる」は、医療サイト「朝日新聞アピタル」(<http://www.asahi.com/apital/>)でも、ご覧になれます。